

01 自信を持って授業を変えるための アクション・リサーチ

コミュニケーション型授業への移行を考えながらも入試に対応できるのかと問われ立ち止まる。和田淳先生は、そんな葛藤を乗り越えようと、授業改革の後ろ盾となる理論を求めながらアクション・リサーチにたどり着きました。見よう見まねで、CLT型授業の成功事例をコピーすることから始め、振り返りと改善を繰り返すうちに、自信を持って授業を進められるようになったといいます。

取材・文__古賀亜未子（エスクリプト）

和田 淳先生

静岡県立清流館高等学校 教諭

大学卒業後、静岡県公立高校教諭として勤務。自身の授業の進め方に疑問を感じ、2016年科目等履修生として名古屋外国語大学のTESOLコースを受講。翌年大学院入学。週末に通学し、現在は修士課程在籍中。



評価し合うことで 互いに学び合う授業

教室の前に大きく表示されたタイマーが時間終了を告げるたびに、席を移動し、ペアを替えて会話を繰り返す生徒たち。教室のところどころから、「Really?」「Me, too」などと、自然な相づちが聞こえてくる。

「最初は会話活動をさせても、教科書の表現を暗記して話す生徒ばかりで、うまくいきませんでした」

静岡県立清流館高校で「英語コミュニケーションⅢ」の授業を担当する和田淳先生はこう話す。実はこの授業、和田先生がアクション・リサーチの手法を取り入れながら、レッスンプランを考え、実践しているもので、名古屋外国語大学大学院TESOLコースのワークショップで、議論を繰り返してきたものだ。

生徒たちはただ会話を繰り返す

のではなく、ペア同士で、あるいはペアの会話を他のペアが見るスタイルで発話を評価し合い、ワークシートに記載していく。その後それぞれが発話と同じ内容で英文ライティングをし、他の生徒が読んで感想を書いていく。スピーキング、ライティングの2技能で、ルーブリックを使用し、相互評価を繰り返す授業だ。

教師になって以来、自身が英語を教えられたスタイルそのままに、文法指導中心の授業をしてきたという和田先生。CLT型の授業導入は「全てを壊す」感覚だったと言う。

「社会の流れとしても、自身の課題としても、授業の型をリセットし、変える必要性は感じていました。しかし入試への不安が拭えず、よりどころとなる理論を求めて大学院に通うようになったのです」

そこで出会ったのがアクション・リサーチだった。

「まずは成果を出している実践をそのままねすることから始めました。後ろ盾となるしっかりしたリサーチがあったことで自信を持って方向性を決めることができたのです」

和田先生は「生徒のコミュニケーション力を生徒同士のインタラクションを通じて伸ばしていくこと」を目標に掲げ、大学院の実践報告にあるCLT型授業の成功事例を取り入れた。授業の仕方、使用教材に至るまで、ほぼ完全コピーだったという。

実践の振り返りと 修正を繰り返す

アクション・リサーチの手法では必ず実践を振り返り、修正につなげる。和田先生は、学期半ばから早速授業アンケートや生徒へのヒアリングを行い生徒の声を拾っていった。すると意外な課題が見つかった。



1 名古屋外国語大学大学院TESOLコースのワークショップでの議論の様子
 2 議論の後に他の受講生から得たコメントも実践に生かす
 3 話す活動でも書く活動でも必ず時間を意識させる
 4 会話活動で、ペアの会話をもう一組のペアが評価
 5 アクション・リサーチで改良を重ねたループリック掲載のワークシート

「自分としては会話の機会が増えればそれでいいと思っていましたが、生徒から『英語が得意な子とのペア活動は意味があるけど、不得意な子とのペア活動は無意味だと感じる』という意見が上がったんです」

早速この課題をワークショップに持ち込んだところ、他の受講生から生徒同士でチェックし合う「ループリック」を使えば、目標が明確になるのではないかという助言を得た。

「すぐにループリックを取り入れたのですが、評価項目が難し過ぎて、生徒の負担になってしまいました。そこで次のワークショップで、ワークシートに入れる評価項目とその記載方法を見直し、今の形になったのです。Conversation strategy (相づちや聞き返すなどの会話を円滑に進めるための戦略) を使っているかどうかをチェック方式で評価することとし、できないことにはフォ

ーカスさせないことが特徴です」

変更後の授業アンケートでは、多くの生徒が「誰が評価しても一定の数値が出た」と回答。課題に対し、良い修正ができたと言顔をみせる。

生徒や自分自身の変化を楽しむ

授業改善の取り組みは3年目を迎え、生徒たちにもはっきりとした変化が見られるようになった。

「以前の生徒たちは、テストの点ばかりに気を取られ、単語や文法の暗記に躍起になっていましたが、今はそんな姿はありません。話すこと・書くことの大切さ、特に、意味を持ったやりとりを行う重要性への理解が浸透したと言えるでしょう」

和田先生が感じている「アクション・リサーチを取り入れる際のポイント」は、①記録を残すこと、②仮

説を立てること、③経験者の助言を聞くことだという。

「自分の感覚に頼るのではなく、データとリサーチに基づく手法なので、負担はかかります。だからこそ成功事例のまねから始めるのがお勧めです。当然生徒の力も環境も違うので、同じようには進められないということが出てきます。そのときに目の前の生徒の反応を見ながらアレンジを加えていけばいい。これが授業改善の一番の近道だと思います」

アクション・リサーチそのものは一つの手法にすぎない。しかし、その手法を使うことで、無理なく、そして自信を持ってCLT型授業の実践に挑めると言うことはできそうだ。

和田先生が挙げるポイントももう一つ、④楽しむこと。

「やってみて駄目だったことも含めて、生徒や自分自身の変化を楽しみながら挑戦してみてください」

02 パフォーマンス・テストの導入と アクション・リサーチ

授業と評価は表裏一体です。

コミュニケーション能力を測るテストが実施されなければ、授業は変わりません。

奥田紀子先生は、CLTの考えを同僚の先生と共有し、学年全体でパフォーマンス・テストを導入。

アクション・リサーチの手法を取り入れながら

コミュニケーション文法指導に取り組みました。

生徒の感想や教師同士の対話を「課題発見と修正の

ヒント」として、たゆみない授業改善が続きます。

取材・文_田中洋子

奥田紀子先生

愛知県立天白高等学校 教諭

大学卒業後、愛知県公立高校教諭として勤務。名古屋外国語大学大学院TESOLコース修了。前任の愛知県立豊田東高等学校ではアクション・リサーチの手法を用いて、「英語表現Ⅰ」の授業にパフォーマンス・テストを導入。2014年より現職。



コミュニケーション手段 として文法を教える

学習指導要領で「オーラル・コミュニケーションⅠ」が「英語表現Ⅰ」に変わったのを機に、奥田紀子先生は「コミュニケーション文法指導」を実践しようと決意した。生徒がコミュニケーションの手段として、習った文法を使えるようにしたいと、前々から思っていたのだ。

言語習得の自然なプロセスに従って、インプットの活動とアウトプットの活動を取り入れたい。パフォーマンス・テストも行いたい。英語を話す力、書く力は、実際に話したり書いたりしないと測れないからだ。

「授業でいくらコミュニケーション活動を行っても、試験が文法の選択問題ばかりでは、習った文法を使ってアウトプットする力が、どの程度身に付いたかは、分かりませ

ん。どうしてもパフォーマンス・テストが必要だと思いました」

パフォーマンス・テストは、テストである以上、学年全体でやる必要がある。そこで「英語表現Ⅰ」を担当する他の6名の先生に相談したところ、幸いにも全員で授業改善に取り組もうと意見が一致した。

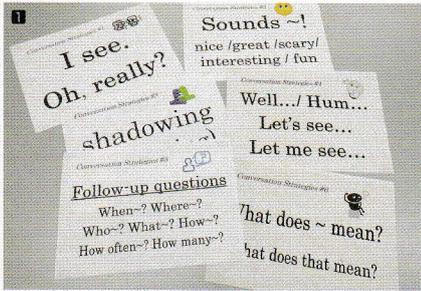
目標達成への道筋を整理する上では、名古屋外国語大学大学院のTESOLコースで学んだ、アクション・リサーチが役立った。アクション・リサーチはPDCAサイクルを具体的に回していく手法だ。まず年度初頭に教師間で目標を共有。日常的に話し合っって現状分析と課題を明確にしなが、次の計画を立て、授業の実践をもとにさらに改善していく。これにより個々の活動の意味やつながりが理解しやすくなり、先生同士のコミュニケーションも活発になった。こうして最終的に、全ク

ラスが同じワークシートを使い、同じアクティビティを実践し、同じ内容を理解した上で、パフォーマンス・テストを受ける体制が整った。

テスト後の「振り返り」も ARのプロセス

奥田先生たちの授業では、まず教科書にある文法項目に即したインプット活動を行う。その単元のトピックが「旅行」なら、初めに旅行に関する会話を聞き、ポイントとなる文法事項が含まれた英文の意味を自然な形で導入する。その後、英文の形(フォーム)に注目させ、新出文法の意味と形に気付かせる。その上で、カードを使ったペアでの会話練習を繰り返し、最終的には生徒自身の経験をもとに、旅行に関する会話ができるようにする。

大きな特徴は、授業で何度も練



①Conversation Strategyは継続して指導。3学期にはFollow-up questionの指導をし、話し手に聞く質問を自分たちで考えさせた
 ②Travel Task Cardsを使用し、カードの内容で旅行の会話表現を練習
 ③担当教師6名で知恵を出し合って作ったシラバス、ワークシートなどは冊子にまとめて保存し、次年度以降の活動につなげたほか、ジャパンタイム発行のDVD『アクション・リサーチから学ぶ英語教授法シリーズ 英語授業を変えるパフォーマンス・テスト【第2巻】高等学校におけるパフォーマンス・テストの実践』で模擬授業も交え、具体的に紹介している

習した会話が、そのままパフォーマンス・テストの課題となることだ。質問する側と答える側、前半後半で役割分担を変え、教科担当とALTの前で、1ペアずつ会話を披露する。

テストの後で Conversation Test Self-evaluation Sheet を配り、必ず生徒自身にテストについて「自己評価」をさせている。「正しい疑問文で質問できたか」「正しい英文で答えられたか」といった設問に加え、「アイコンタクトはできていたか」「相づちなどの Conversation Strategy をうまく使えたか」といった問いもある。

これらの質問について、生徒は「全てできた」から「まったくできなかった」まで、4段階で自己評価を行い、さらに今回のテストで自分の良かった点、今後の目標や改善したいことも書いていく。

生徒によるテスト後の「自己評価」

は、アクション・リサーチにおける Reflection に当たる。これをもとに、生徒自身が自分の改善点、目標を考えて学習に臨むのだ。アクション・リサーチではこのように、指導する側の教師だけでなく、授業を受ける側の生徒も、共に授業改善に向けたサイクルを動かすことになる。

「振り返り」が学びを深める

テストの後に限らず、授業に対する感想や、習った内容をどの程度理解できたかなど、生徒の「振り返り」の機会を折々に設け、モニタリングに余念がない。

「Reflection は、教師にとっても生徒にとっても重要です。これが欠落すると、どんな活動も、そのとき限りのやりっ放しになってしまいます。こまめに振り返りを行うことで、気付いたことを先へ先へとつなげる

ことができ、教師の授業も、生徒の学びも、継続して深まっていく。それがアクション・リサーチの前向きなスパイラルだと思います」

奥田先生は、アクション・リサーチのために集めた生徒の声を、他の先生たちと共有し、話し合いの中で現状を分析し、課題を明確にしてから次の計画をするという流れで、授業実践と改善を繰り返していった。

「アクション・リサーチは、まったく難しいものではありません。いくつかのプロセスをたどって少しずつできることを続けるうちに、授業が変わり、自分も変わります。私の場合、一緒にやってくれる同僚に恵まれたこともあり、何より仕事が楽しくなりました。学校としてこうした取り組みを続けていけば、ハンドアウトや教材も年々改良され、どんどん授業が良くなっていくだろうと、楽しみに思っています」

03 学校全体で継続的に取り組む アクション・リサーチ

主体的・対話的で深い学びの実現を目指す上では、カリキュラム・マネジメント、つまり学校全体として、教科や学年を超えた組織運営の改善を図ることも重要な鍵となります。そこでご紹介するのが、平野充先生が前任校で取り組んだ授業改善プロジェクトです。アクション・リサーチの手法を導入し、組織的に行った改革は、生徒や同僚の先生方にもどのような変化をもたらしたのでしょうか？

取材・文__仲藤里美

平野 充先生

神奈川県立横浜国際高等学校 教諭

大学卒業後、青年海外協力隊員および2002FIFA公式通訳を経て岐阜県公立高校教諭となる。勤務の傍ら、名古屋外国語大学大学院のTESOLコースに通い、修士・専修免許を取得。その後、岐阜県立各務原高等学校で授業改善プロジェクトに取り組む。2013年より現職。



校長主導で始まった 授業改革プロジェクト

「正直なところ大変でしたが、それだけの成果があったと思います」

そう振り返るのは、現在は神奈川県立横浜国際高等学校で教壇に立つ平野充先生。2009年からの3年間、前任校である岐阜県立各務原高等学校で、アクション・リサーチの手法を取り入れ、4技能の統合的な育成を目指す英語の授業改革プロジェクトに取り組んだ。

前任校での勤務時代、教師としての力不足を実感し、名古屋外国語大学大学院に入学。佐藤一嘉先生の下で英語教授法を学び、TESOLを取得した。その後各務原高校に異動となり、英語科で前年から始まっていた授業改革プロジェクトに参加。「当時の各務原高校の校長先生が、もともと英語教員だった方

で、その主導の下でプロジェクトが進行中だったのです」と平野先生は言う。

当時、同校英語科にはTESOLを取得した教員が平野先生を含め3人勤務していた。そこで、その3人をチームリーダーに、英語科に3つのチームを編成。各学年のプロジェクトを担当していく形を取った。

リーダーとして最も苦労したのは、チームの先生方にプロジェクトの意義や意味をどう伝え、納得して取り組んでもらうかだったという。

「プロジェクトを進める上で、従来よりも大幅に業務量が増え、教師の負担は大きくなりました。当然、『そこまでやる必要があるのか』という反発の声もありました」

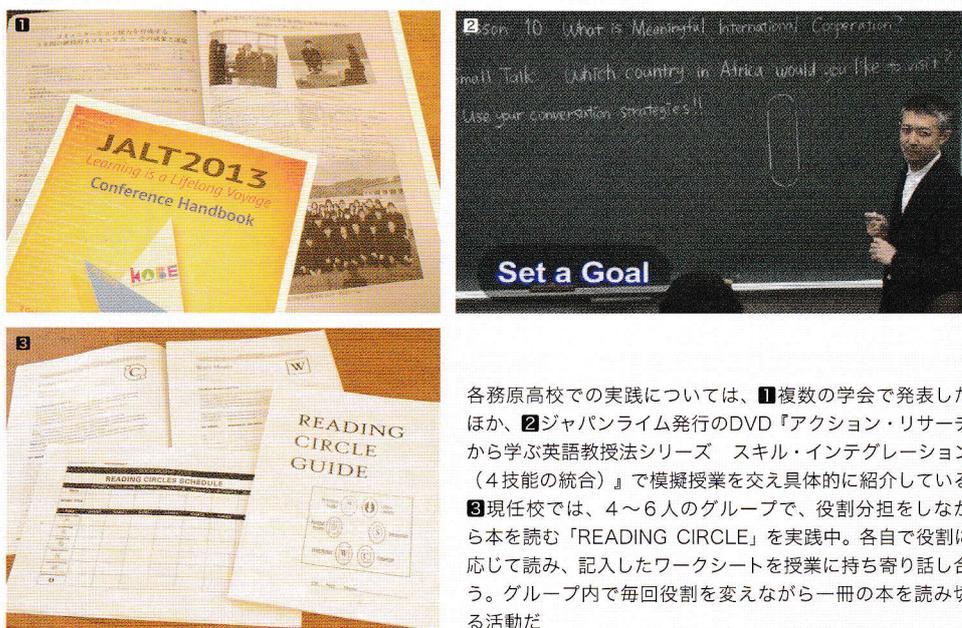
週に1回はチーム会議を開き、「この仕掛けは効果があったのか」「このテーマはもっと時間をかけて学ばせた方がいいのではないか」など、

週の授業の進め方を細かく振り返って検証。場合によってはその内容を反映し、翌週の配布物などを作り直したりする必要もあった。

「さらに、例えばスピーキングテストでは共通のルーブリックを使用し、生徒同士の対話の様子をビデオに撮り、指定したConversation strategyを使っているか、何回使ったかなどを細かくチェックするので、評価には生徒1人当たり最低15分はかかります。ライティングの赤入れなども生徒一人一人のレベルに合わせて細かく行っていましたから、早朝や深夜の時間を使わざるを得ないこともありました」

明確に表れた生徒たちの変化

それでも、さまざまな取り組みを重ねるうちに、授業改革プロジェクトの効果は明確な形で表れ始めた。



各務原高校での実践については、**1**複数の学会で発表したほか、**2**ジャパンタイム発行のDVD『アクション・リサーチから学ぶ英語教授法シリーズ スキル・インテグレーション（4技能の統合）』で模擬授業を交え具体的に紹介している**3**現任校では、4～6人のグループで、役割分担をしながら本を読む「READING CIRCLE」を実践中。各自で役割に応じて読み、記入したワークシートを授業に持ち寄り話し合う。グループ内で毎回役割を変えながら一冊の本を読み切る活動だ

生徒たちの変化である。

例えば、リーディングの能力を伸ばすために始めた「多読」の取り組み。英語の書籍を新たに約2000冊購入し、使用していない教室を多読部屋として改造した。

「本の英語レベルは幅広くそろえ、1ページに1文しかないような超初級の本も加えました。すると、『これなら分かる、面白い』と英語が苦手だったはずの生徒も多読に集中するようになり、本を貸してほしいと来るようになったんです。それを見た担任が『あの生徒が英語の本を？』と驚いていたこともありました」

また、特に力を入れたのは、生徒に「英語でアウトプットする」体験を積ませるための仕掛けづくり。毎回の授業の最初に「スモールトーク」と称する時間を設けた。授業に関するトピックについて3つ質問を挙げ、Conversation strategyを使

いながら、毎回異なるペアと話す。

「最初はほとんどの生徒があいさつ程度しか話せませんでした。相手の言ったことを繰り返した後、相手の言ったことを繰り返した後、相づち、突っ込み質問などのやりとりを重ねるうちに、ちょっと違う表現を試したりする生徒が増えてきて。英語表現がしっかりと身に付いていくのが分かりました。途中からは、私が質問を3つ黒板に書くや否やペアで話し始めるようになりました」

そうした生徒たちの変化が評判になり、他校の先生方が、しばしば授業見学に訪れるように。同時に、成果を実感したことで、プロジェクトに理解を示し、主体的に取り組むようになった先生も多かったという。

成功のポイントは、全校的に理解を広げること

3年間にわたり、全校的にプロジ

ェクトを推進し、結果を出すことができたのはなぜか。平野先生は「予算を確保するという点では、やはり校長のリーダーシップがあったことは大きかった。でも、最も重要な鍵になったのは、英語科以外を含む全教員とのコラボレーションだったと思います」と振り返る。

複数の教室を使ってスピーキングテストを行ったり、生徒の作成したエッセーを教室や廊下に張り出したり。そうした、英語の授業だけに収まらない取り組みをスムーズに進めるには、プロジェクト担当ではない教員たちの理解も不可欠だった。

まずは校内全体にプロジェクトの認知度を高め、全教員にその意図を理解してもらうこと。今後、同様の取り組みを進める場合にも、最も重要なポイントになるのではないかと――。それが、プロジェクトを振り返っての平野先生の実感だという。